

檀信徒・霊園使用者各位に発行しています。

令和最初の年末年始



お寺の境内の広葉樹も短い秋を彩ったと思つたらすぐに冬支度を始めてしまいました。実は私は冬の枯れ木の様が好きです。春の若葉、夏の勢い、秋の彩り、そして季節と共に黙つて肅々と冬支度。その季節ごとの生きる様子が深くまたいじらしく思えるのです。本堂に掲げてある詩額「花は黙つて咲き黙つて散つてゆく」は柴山全慶老師の傑作ですが、そのときその瞬間に文句も言わず条件も出さず、ひたすら懸命に生きる姿の美しさを謳っています。こうやって生きるべきなどと声高に言うこともないのですが、来年もまた二日一時、一生懸命に頑張つていきましよう。

仏事に関する

四方山話

近所に出来た葬儀会場のチラシを何気なく見てみると「ワンデー葬儀セット」という商品(?)が大きく掲載されていました。「忙しい御葬家様に...」「費用を抑えたい方に...」「列席者が少ないお葬儀に...」と説明文。喪主となる方、また御遺言などで「通夜なし葬儀のみ」というスタイルを選択することもあるでしょう。しかしいざというときに備えて今から考えておきたい事柄だと思ひました。

死者儀礼、いわゆる葬儀式や法要などは世界の様々な宗教でも必ず行われています。仏教で行う葬儀式の起源は「涅槃経」などの經典に拠っています。お釈迦様は亡くなるまえに自身の葬儀を「転輪聖

王の葬法に倣え」と御遺言されました。これは出家する前はお武家さんだったお釈迦様が、「大げさにすることなく、伝統的な方法で当たり前にやればよい」という趣旨のご発言です。ついにお釈迦様が亡くなると、知らせが送られます。しかし筆頭弟子の迦葉尊者をはじめ、各地で布教をしている弟子が集まるのは七日の時間が必要でした。その間、お付きだった阿難尊者がそのお体を清め、香を焚きながら皆が集まつてくるのを待っていたそうです。これが一夜を死者と共に過ごすという通夜の始まりとみる事が出来ます。

阿難尊者は長年お釈迦様の布教のたびに連れ添った弟子でした。お説教はもちろん、お釈迦様との二人だけの会話もたくさんあったと思います。師との思い出は誰よりも深かったことでしょう。皆が集まつてくれば、葬儀や火葬の段取り、信者の弔問の相手をしなくてはなりません。亡き師との最後の時

間である七日間、今のうち、この静かなひとときのうちに、阿難尊者はそれらの思い出、御教えを一つ一つ思い出し、自分の心に刻んでいったことでしょう。阿難尊者にとつてかけがえない、宝物の時間であつたと思います。

考えてみれば、通夜の時間は亡くなつた方と唯一ゆつくりと過ごす事の出来る時間であります。翌日には仏様となつて御浄土へ向かわれる。お顔は茶毘に付されて見えなくなつてしまふ。今のうち、この静かなひとときの内に亡き人との思い出を振り返り、心に刻むことが出来るのが通夜という時間なのです。だから是非、お通夜は大事にしたいだきたいと思うのです。お忙しいのはわかります。でも家族との最後ですよ。費用が気になるのもわかります。でも節約は出来るし、実際はそんなに変わりませんよ。参列者が少なくても、はなからそんなことは問題ではないのです。たとえ一人でも(僕がお経に行きますから二人でいい)その時間がかげがえない、取り戻せない大事なひとときであることには変わりはないのです。



南禅寺山門より京都市内

ワンデー葬儀。家族葬。

直葬。様々な葬儀の形は宣伝されていますが、大事なことは亡くなつた方とどうやつてお別れの時間を過ごしたいか、過ごせるか、ということです。

死者を送る、その大事な時間をどう過ごすか。そのときまでに、考えておく必要があるのかもしれない。迷つたら、お寺に相談してください。



先日あるお家に法事で出向きました。二年前、奥様を亡くされた喪主さんは御年94歳。豊饒とされていたのですが、法事の時は地方に住むご兄妹、甥っ子さんが手伝つてお掃除し、いつも満面の笑みでお迎えくださいます。この時は三回忌。いつものようにきれいなつた仏壇を前に読経し

ばし。この方は元大学教授で、しかもお父上はお寺のご出身。私の後ろで一緒にお経をお唱えくださいます。中でも「観音経世尊偈」という長いお経まで誦んじました。お父様に教えられたそうで、今でもしっかりとご記憶なさつていらいます。お経を終え、お茶を頂いているときにフト、「和尚さまに一つ教えて頂きたい。お経の本には、仏法僧を篤く敬えとありますね。仏は仏様、法は教えのこと。僧というのはお坊様のことで

すか？」とご質問頂きました。昔から氣になつていたのですが、ナカナカ聞ける人が居なかつたので」と。大変有り難いご質問です。「おつしやる通り、仏はお釈迦始め御仏のことです。法はその教え。そして僧といふのは坊さんのことではなく、仏教を信じる仲間たち、仏教徒のことです。坊さんはもちろん、ご主人やご家族のみなさん、仏教を信心する人全ての皆さんをさします。だから仏法僧を敬え、と言うことは、

仏教徒は互いに敬いあい、大事にしあいなさいと云う意味です」とお答えいたしました。「ほお、そういうことでしたか。なるほど、大変納得がいきました」と深くうなずかれ、そしてすぐさま、傍らにいた妹さんを拝んで「ありがとういつもワガママを聞いてくれて」と手を合わせたのです。「わたしはあなたを敬つておりますヨ」とニコニコしながら合掌礼拝。驚きながら妹さんもまた「いやだあお兄さんたら。わたしもお兄さんを尊敬していますヨ」とこれまた手を合わせてニコニコ。甥御さんにも合掌、甥御さんも返して合掌。そこに居た方みんな合掌し合ひ、アハハと朗らかに笑うのをみて、あまりの有り難さに涙がこぼれました。そして私もあらためて皆さんと合掌礼拝しあい、笑顔のまま、ご自宅を出ました。

七仏通戒偈には「もろもろの悪を作すことなかれもろもろの善行を行い奉るべし自ら其の意(こころ)を淨くたもて これすなわち仏の教えなり」とあります。しかし「善行」というのは、なかなか出来ないことです。席を譲る、手助けをする、そういった日常の事でさえ、氣恥ずかしさが先だつて、ためらつてしまふ事もあります。

しかしこの方は、ご自分のお年や輝かしい来歴にかかわらず、まったく素直に私のような若造に教えを請われ、「仏法僧は互いに敬い合うことだ」という一言を聞いてすぐさま、そのまます素直に行動にうつされたのです。これはまさに自らの御心を淨く保たれたという事で、そこに、まごう事なき仏教の姿が現れたのだと思うのです。良い行いならば、そのままためらわずに行うこと。そこには何の遠慮も、恥ずかしさも関係ないのです。私自身で出来ていなかったことを、これほどはつきりと教えていただいて、思い出すと有り難くてまた涙がこぼれそうです。

実はこの方は、一月あまり後、愛する奥様の元に御旅立ちになりました。全く残念でなりません。今でもこの時のことが頭から離れません。なんて幸せなひとときだつたことだろう。本当に坊さんになつて良かったなあ、勉強したことがお役に立つて、そして仏の姿とはどういふものか教えて頂いたなあ、心から思えてきます。あの震えるような感動を私は生涯忘れないでしょう。

えかい
につき

去る11月13日に台東区

三ノ輪の月洲寺様にてお坊さん向けの法話の勉強会を開いて頂きました。中央道の運転には大分慣れてき

ましたが、首都高は未だに緊張します。八王子でお世話になるまで車で山梨を出たこと等殆どありませんでしたから、そう考えると少しは成長したかなと感慨深いです。

講師に宝泉寺ご住職をお迎えし、大勢の和尚様が聴講にいられての盛大な勉強会でありました。参加された各和尚様方は、若い方もベテランの方も熱意をもつて苦心、工夫をされながら普段のお話をされているご様子がひしひしと感じられました。そして勉強会を締めくくるご住職の熱の入った講義に、皆か

じりつく様に聞き入っていました。「あつという間の90分。まだまだ拝聴したかった」と早くも第二回の要望が強まっております。準備をされるご住職は誠に大変かと思いますが、私も第二回開催を熱望する一人でございます。

実は道場での修行中はこういうお話の勉強と言うものは一切ございません。己事究明、己に向き合う事が第一であるからです。勿論道場から出て各自お寺に戻ってから己に向き合わなければいけないのですが、それと並行して外にも向き合わなければいけません。しかし最早叱ってくれる先輩もおられません。怠けようと思えばいくらでも怠けられるのが現状です。正直に申しますと私も今年の試験が終わって以来気が緩んでおりました。今回の勉強会を機に気を引き締めていきたいと思います。牛腸恵海

先代大暁和尚

小祥忌(一周忌)厳修



過日、九月三十日、先代住職藤本大暁和尚(享年75)の小祥忌、いわゆる一周忌を当山本堂にて行いました。お寺の住職の法要は「斎会(さいいへ)」と呼ばれ、関係の深い和尚様をお招きし、行われます。今回は大導師に向嶽寺派管長瑞松軒老大師猊下をお迎えし、南禅寺派から三十名を超える和尚様方、また私の修業時代の同期たちも全国から集まってくれました。

小祥忌、いわゆる一周忌は「礼記」などによると、喪中の半分の期間を経たときに行うもので、生活の規範等が厳しく定められ、死者の穢れ(死への恐怖、畏怖)の障りも多くあることから、この期間無事に過ごすことが出来たことを、皆で喜び合い、御仏に感謝申し上げるのが習わしとなっています。今回の斎会も、晴れやかな中、無事に終わることが出来ました。誠に有り難いことであります。何しろ宝泉寺で正式な斎会が行われるのはおそらく100年ぶりのこと。準備にも気を遣っただけに感無量です。今回は催行の都合上、檀信徒の皆様をお招きできなかったのが残念でした。しかしながら古式に従って厳粛に執り行うことができました。

皆様のお心遣いに感謝申し上げます。誠に有り難うございました。来年は大祥忌(三回忌)を行います。

令和二年 年忌表

令和元年(平成三十一年)に亡くなった人は	一周忌です
平成二十六年に亡くなった人は	七回忌です
平成二十年に亡くなった人	十三回忌です
平成十六年に亡くなった人は	十七回忌です
平成十年に亡くなった人は	二十三回忌です
平成八年に亡くなった人は	二十七回忌です
昭和六十三年に亡くなった人は	三十三回忌です
昭和四十六年に亡くなった人は	五十回忌です

お位牌などをご確認ください 法事の予約はお早めに

あいうえお用語辞典
槌砵(ついちん)

法要に於いて仏名を唱えるときに打ち鳴らされる木槌と台。主に食膳を真前に供えるときに用いられる。当山の「槌砵」は先代住職が若いときに庭に植えた松で作られている。一周忌に合わせて、住職が作りました。えっへん。



墓地管理料

納付のお願い

宝泉寺八王子南霊園、新八王子南霊園では毎年春に墓地使用者方への管理料の納付をお願いしております。毎年春に、振込用紙を同封したお知らせを送りしておりますが、平成三十一年度分管理料をまだお納め頂いていない方は、なるべく速やかに御納付をお願いいたします。過去の納付状況や各お問い合わせは宝泉寺までお願いいたします。管理料は数年分まとめて納付することも出来ます。またご事情のある方は充分に考慮し対応いたしますので、どうぞご相談ください。



我が輩はニャンである。

しかし忙しいとき、玄関はなかなか開かない。仕方がないのでしばし待つ。



境内のバトロールは日課だが、八王子の冬は寒い。すみやかに中に入れてほしい。

霊園だより

今年もあとわずかなって参りましたが皆様いかがおすごしでしょうか。

この年末年始とも管理事務所では、お花お線香を用意して皆様をお待ち申し上げておりますので、ぜひご利用ください。通常のお花より大きなものも事前にご連絡いただければご用意させていただきます。また、墓参りに気になった外柵のずれや目地の欠けなどの修理、墓地工事のことはもちろん、墓石クリーニングも承っておりますので、とりあえずの見積もりだけでもお気軽に管理事務所にお問い合わせください。

末筆ではございますが益々の御健勝をお祈り申しあげます。

畑山

オススメ図書

「草や木のように生きられたら」

今年2月九十三歳で亡くなった、上方落語の笑福亭松之助の自著。タレント明石家さんまのお師匠さんです。腕白ながら「生きる」と言うことについて深く考える子供時代。苦しみながら芸を磨く青年時代。晩年は禅への造詣も深く独特の悟りさえ感じさせる。「さんまがあれほど売れるのは今、ここに一生懸命だからや」ヨシモトブックス1600円。

